

## <巻頭言>



### ダム事業における新しい質の追及

荒井 治\*

最近時代は、目まぐるしく変動しています。昨年だけでも湾岸戦争やソビエト連邦の実質的な解体等、まさに劇的な時代の変化とも言えるような事件が引き続き起きています。それと同時に、GATT ウルグアイランドをめぐるアメリカやECとの攻防、日米間の建設協議など日本を取り巻く諸状況も大きく変化しようとしています。このような激動する時代の中にあって、河川総合開発事業を取り巻く環境も大きく変化してきています。

わが国のダム築造の起源は、紀元1世紀とされていますが、河川総合開発事業による本格的な多目的ダムの建設は昭和になってからになります。しかし、そのほとんどが、治水・利水という視点から築造され利用されてきました。すなわち、わが国の河川は、流路が短く急勾配でその上降雨が梅雨期や台風期に集中するため、「暴れる水」となってしばしば災害を引き起こす一方、一人当たりの降水量がすくなく水需要が年々増加しているため、少しでも日照りが続くと水不足を引き起こします。この日本の河川が宿命的に抱えている2つの側面、すなわち「暴れる水」の鎮静と、「足りない水」からの脱皮のために古来からダムが築造されてきました。

しかし、最近、生活が多様化するにしたがって、ダムおよびダム周辺に寄せる国民の期待には、治水・利水という本来の機能だけでなく、より人間味のある新たな要素が加わりつつあります。その意味で、ダム建設への取組には従来にはない発想の転換が求められています。その一例が、水と緑を基調とした国民に親しまれるダムづくりであり、地域活性化の核足り得る景観の保全と環境の整備であります。

このような現状を踏まえ、今年からスタートする第8次治水事業5箇年計画も、安全な社会の形成、水と緑豊かな生活環境の創造、超過洪水・異常渇水等に備える危機管理施策の展開が主要課題となっており、単なる河川施設の整備ではなく、グレードの高い良質な社会資本ストックの形成をめざしています。しかし、この第8次治水事業5箇年計画を達成するためにも、人々の理解と支持が最も大切であると考えています。そのためには、ダム事業においても人々のダムに対するいろいろなニーズを取り入れ、人々に親しまれると同時に地域の活性化に寄与するようなダムを建設していくことが大切です。

\* 建設省河川局開発課長

幸い、緑に包まれたダムは、多くの人々に潤いと安らぎを与える身近な空間として、大きな可能性を秘めています。しかし、そのダム空間をより一層周囲の自然と調和を図りながら整備し多くの人々が楽しめる空間として活用されるようにしなければなりません。一方、水源地域の自治体では、このようなダム空間の特性を踏まえてダムを地域活性化の核に位置付けようとする機運が高まっています。これを援助、支援していくことは、さらに幅広い地域住民がダムに親しみを抱き、ダムの意義を知り、ダム事業への関心を高める契機となると思われまます。

そこで、従来から、環境用水を確保する水環境対策ダム事業、湖面利用、キャンプ場等のレクリエーションと一体となったダムを造るレクリエーション多目的ダム事業、ダムおよびダム周辺の施設等が歴史的に保存する価値がある場合積極的に保存していく歴史的ダム保全事業等地域の人々のニーズを取り込んだダム事業に努めてきました。さらに、平成4年度から新規事業として、地域に開かれたダム事業を実施していくことにしています。この事業は、これまで一般の利用を原則禁止してきたダム本体及び湖面を可能な限り一般に開放し、あわせて貯水池周辺を水と緑のオープンスペースとして国民の要求する魅力的な余暇活動の場として整備するとともに、貯水池周辺のイベント情報の紹介等の情報ネットワークの構築等を行うものです。

その際、大切なのは、ダムそれぞれが個性をもつべきだということです。周辺の土地の自然・風土はもちろん、生活習慣や産業、歴史、文化といった地域特性を十分に生かし、個性豊かなダムを整備することが重要です。今後は、ダム建設に当たって従来の機能第一の考えに加えて、プラスアルファの魅力を備えた新しい質を追及していくことが大切であると考えています。